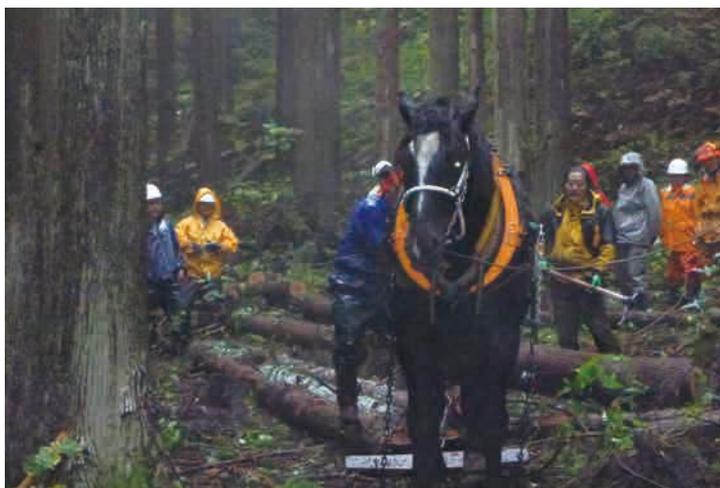


## これから

「ワーキング・ホース協会」が主催しイギリスのチャールズ皇太子が名誉総裁を務める「地駄曳き競技会」に昨年出場し、優勝した。この大会は、6mの丸太を馬で引く競技で、スラロームしたり、丸太を載せる馬車に丸太を載せる正確さを競う。今年も昨年に引き続きイギリスでの大会へ出場を予定している。「地球環境を考える中で地駄曳きは絶対必要な職業」であると確信している。



馬が伐採した木材を運ぶ

NPO

## 海と山と川があって、はじめて暮らしが成り立つ。

大槌町

芳賀 正彦 NPO 法人吉里吉里国

取材日 2012.1.24

吉里吉里地区はこれまでも幾度となく災害が起きた地区で、先人たちは厳しい自然と折り合いをつけて生きてきた。当NPOは震災後、先人の「自然と共生する知恵」に学び、住民自らリスク管理できる街づくりを目指そうと住民有志が自ら設立した。地域の財産である海と山の恵みを最大限に活かし、新たな雇用の創出をしながら地域再生に取り組む。

## 3月11日 14時46分

あの日、高さ約15mの大津波に襲われた。自宅から避難する時は、ラジオと携帯電話だけを持って逃げた。逃げる途中、携帯電話のカメラでシャッターを切り続けた。でも、保存のボタンを押さなかったため、その当時の画像は1枚も残っていなかった。何も考える余裕がなかった。吉里吉里小学校に避難し、津波が来るのを見ていた。津波の第1波から最後の波まですべてを見ていた。津波が引いた後は、町がほとんど無くなっていた。ただ茫然とするだけだった。「何もかもが終わってしまった。」「個人、家族、町の人の暮らしが無くなってしまった」と。

## 町の人々と協力して

寒い日だったので、避難所にいた男性達が壊された家の廃材を避難所に運び、小学校の校庭で暖をとった。同時に別の男性はスコップを探して校庭に穴を掘り、男性用、女性用のトイレを作った。女性達は手分けして高台に残った家を1軒1軒回り、食料や毛布など物資を集めるのに奔走した。行政機関とも連絡はとれない。自治組織や消防



分団員などのリーダー達が約12名程集まり、自主的に災害対策本部を立ち上げ、活動を開始した。町には4台ほど重機が残っていたので、次の日から重機の所有者と協力しながら国道や町道の瓦礫を撤去した。同時に行方不明者の捜索、町の農村グラウンドの瓦礫を撤去してのヘリポートづくり、町の小さなガソリンスタンドの地上部分は津波で破壊されていたが地下タンクに残っていた石油、灯油の汲み上げ作業に追われた。災害から3、4日目にヘリポートも完成し、自衛隊が到着して緊

急支援活動と行方不明者の捜索活動が本格的に始まった。3月末までは「生き延びる為の期間」だった。4月30日、吉里吉里小学校から旧吉里吉里中学校の体育館へ避難所が移ることになった。小・中学校で入学式、小学校と中学校の合同授業を開始するためだ。大槌町で校舎が被災していなかったのは、吉里吉里小学校と吉里吉里中学校の2校だけだった。自衛隊と協力して行っていた行方不明者の捜索は、この頃まで続いていた。警察が、身元確認ができない人々の写真を持って訪れたこともあった。男性か女性かの判別もできないくらい悲惨なものだった。瓦礫撤去が本格的に始まったのもこの頃だ。避難所の最後の1人が仮設住宅に移ったのは、8月の初旬頃だった。

## 復活の薪プロジェクト

瓦礫の中の廃材から薪として使える材料を集め、釘抜き、薪割りをして袋詰めし、販売する「復活の薪」プロジェクトを立ち上げた。この試みはTVや新聞に取り上げられたこともあって、予想を越える反響をいただき全国から注文が集まった。このプロジェクトは、昔のような吉里吉里三陸の海を取り戻すことを目的とした、最初の活動であった。もちろん、避難所生活者の自立・生活再建、さらに瓦礫処理のための活動でもあった。注文受付は瓦礫の廃材がほぼなくなった9月30日で終了し、現在は森林の間伐を行う「復活の森」プロジェクトの活動が始まっている。山に入り間伐や森林整理をしているが、チェーンソーを持つての労働は体力的にきつく思うことがある。けれども犠牲になった方々を思うと、不思議と足が動く。

## 大震災を振り返って

目に見えない力で自分が助けられた思いがする。犠牲になった方々に恥ずかしくない、笑われない



撮影：2012.3.11 3.11祈りの灯火

ような生き方をしなければいけないと思う。

これまで、あまりにも物質的な豊かさに依存した生き方をしていた。3月～8月までの避難所生活を振り返ると、3月11日以前の暮らしは、お金や物が溢れすぎていた。まもなく大震災から1年が経ち、人々は当時の事を忘れようとしている。立派な家を建てたい、立派な洋服を着たいと元の生活に戻ろうとしている。また子どもや孫の時代で津波の被害に合うのかと思うと心配でならない。

朝はおにぎり1個、昼はアンパン1個で毎日暮らしていた。それでもあの小さな避難所でコミュニティは生まれていた。あのようなことは忘れてはいけないし大事な事だ。声をかけたこともなかったような人達が、同じ避難所で枕を並べて生活したことで、本当のコミュニティができていたような気がする。

津波は大きな災害を残したが、多くの事を教えてくれた。三陸沿岸という町は、海と川と山があって始めて暮らしが成り立つ地域だということを忘れてはいけない。だからこそ、自然の恵みを授かる術をきちんと身につけた自分を誇りに思う。自然と共に生きる知恵の中から人口流失、限界集落といった問題がクリアされていくと思っている。



撮影：2011.5.17 大槌復活の薪プロジェクト



撮影：2011.10.20 ハロウィン用大かぼちゃに刻まれた文字